

よりよい生徒指導に向けて

第Ⅱ章 場面指導事例【特別活動編】

山口県教育委員会

目次

第Ⅱ章 場面指導事例 【特別活動編】

I 特別活動で児童生徒を生かす

- 1 特別活動の目標 1
- 2 計画・実施上の留意点 1
- 3 児童生徒を生かすための視点 2
- 4 「特別活動で児童生徒を生かす」概念構成図 3

II 義務教育編

- 1 よりよい食生活をめざした給食の時間（小学校・低学年） 4
- 2 児童が主体的に取り組む清掃活動（小学校・中学年） 5
- 3 児童が熱心に取り組む運動会の練習（小学校・高学年） 6
- 4 生徒が主体的に参加する修学旅行（中学校） 7
- 5 全校集会での生徒指導的な話の進め方（中学校） 8
- 6 生徒が家庭学習の習慣を身に付けるための工夫（中学校） 9

III 高等学校教育編

- 1 一人ひとりが積極的に参加する合唱コンクール（高等学校） 10
- 2 文化祭における積極的活動で生徒を生かす（高等学校） 11
- 3 生徒会リーダー研修で生徒の主体性を育てる（高等学校） 12
- 4 自覚を高めて生活のリズムをつくる（高等学校） 13
- 5 キャリア教育を通して進路を明確にし、自己実現をめざす（高等学校） 14

IV 特別支援教育編

- 1 係活動等における配慮 15
 - 2 全体集合等の場面における配慮 16
 - 3 学校行事等の場面における配慮 17
-

I 特別活動で児童生徒を生かす

特別活動は、「各教科・科目」「道徳」「総合的な学習の時間」とともに、教育課程の柱となる要素であり、「学級活動（ホームルーム活動）」「児童会・生徒会活動」「学校行事」の三つから構成されます。

学校教育において、教科の教育とそれ以外の活動とが相まって、調和の取れた人間形成を図ることができます。中でも、特別活動は、人格形成期の児童生徒にとって重要な役割を担うものであり、自主的・体験的な活動を重視した望ましい集団活動を通して、好ましい人間関係を形成するために必要な能力や態度を育み、集団や社会の一員としての自覚と責任感を深めるとともに、豊かな人間性や社会性を伸ばします。

また、教師にとっても、活動の充実を図るために、創意工夫の必要があり、家庭や地域との連携・協力も不可欠であることから、学校の特色づくりや開かれた学校づくりを進める上で、重要な役割を果たすものです。

1 特別活動の目標

特別活動の目標は、小・中・高等学校共通の内容をもとにして、児童生徒の発達段階に応じた内容のレベルアップが図られています。例えば、高等学校の目標は、次のとおりです。

- (1) 望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸ばしを図る。
- (2) 集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。
- (3) 人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

2 計画・実施上の留意点

(1) 全体計画の作成

各学校の教育目標や教育方針のもと、児童生徒の生きる力の育成を図る観点から、児童生徒の自主性を伸ばすため、生徒や家庭・地域の意向にも配慮しながら、特別活動の全体計画及び各内容ごとの指導計画を作成します。

(2) 家庭や地域との連携の推進及び体験的な活動の充実

家庭や地域との連携や社会教育施設等の活用などを工夫し、実施に当たっては、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合いや、ボランティア活動、就業体験（インターンシップ）、自然体験等、体験的な活動をできるだけ多く取り入れます。

(3) 生徒指導、進路指導、教育相談との連携・充実

生徒指導は、教師と児童生徒の信頼関係の中で、児童生徒が主体的に判断、行動し、自己指導能力を高めていくことができるよう、支援するものです。

特別活動は、その目標や内容等が生徒指導と深くかかわっており、生徒指導の機能（①自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与えること）を生かすことによって、指導の効果が上がります。

このように特別活動の充実は、問題行動の未然防止に向けた抜本的対策の一つであり、児童生徒を積極的に育てる生徒指導を推進する役割を担うものです。

また、進路指導、教育相談（進路相談を含む）についても、ガイダンス機能を充実させるなど、特別活動と連携し適切に実施することが求められています。

(4) ガイダンス機能の充実

不登校など、多様な児童生徒に的確に対応するため、学校生活へのよりよい適

応に向けた、きめ細かな指導をする必要があります。

また、選択教科・科目や類型、進路選択等についてのガイダンスの場や機会の充実を図るとともに、児童生徒の選択能力や将来の生き方を考え、行動する力を育成することが大切です。

3 児童生徒を生かすための視点

(1) 学級（ホームルーム）活動

ア 教師と児童生徒、児童生徒相互の受容的な人間関係をつくる

相手の立場に立って、思いや考えをくみ取るよう努め、それがどのような内容であっても大切なものとして取り扱うよう支援する必要があります。

また、相手のよさを見いだそうとする中で、率直に自分の考えを表明するとともに、相手の考えを冷静に聞く態度が身に付くよう支援することが大切です。

イ 共同・協力のもとに、集団としての目的意識が高まるように工夫する

集団活動において、児童生徒が課題の解決や仕事を遂行する過程で、コミュニケーション力を高めるとともに、忍耐力、協調性などの健全な人間形成を図り、集団としてのモラルを培っていくことが大切です。

(2) 児童会・生徒会活動

ア 児童生徒の自発的、自治的な活動となるように工夫する

教師は、児童生徒の活動する各場面において、児童生徒が自主性を最大限に発揮し、集団としての力を出せるよう、周到に計画を練り、工夫を怠ってはなりません。

イ 中心となる組織の構成や構成メンバーの人間関係づくりに配慮する

多くの児童生徒が活動を体験できるよう配慮するとともに、共同の活動を仕組むなど、連帯感が育つような工夫が必要です。

ウ 活動についての目標設定・振り返りを適切に行う

活動実績を把握するカードなどを作り、児童生徒が取組や成長を適切に自己評価しながら、目標に向かって前進しようとする意欲を引き出すことが大切です。

(3) 学校行事

ア 児童生徒が意欲的に取り組めるよう工夫する

児童会・生徒会活動との関連を図るとともに、児童生徒が自ら学校行事に主体的に参画できるよう、内容や運営方法を工夫することが大切です。

イ 他の教育活動と関連付けた活動となるよう配慮する

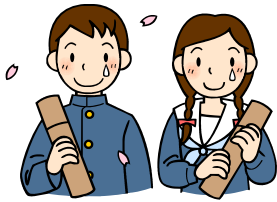
各教科、道徳、総合的な学習の時間や特別活動における教育活動の成果が他の領域等に生かされるよう、関連付けを図る必要があります。

ウ 学校や地域の実態に即したものとなるようにする

学校行事は、学校の施設設備や児童生徒数、地域の人々の協力体制などに総合的に配慮しながら、活動を展開する必要があります。

特別活動で児童生徒を生かす

身に付けたい力

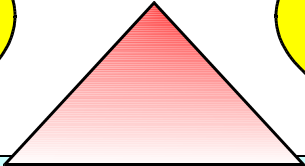


好ましい人間関係を形成するために必要な能力や態度を育む



集団や社会の一員としての自覚と責任感を深める

豊かな人間性や社会性を伸長する



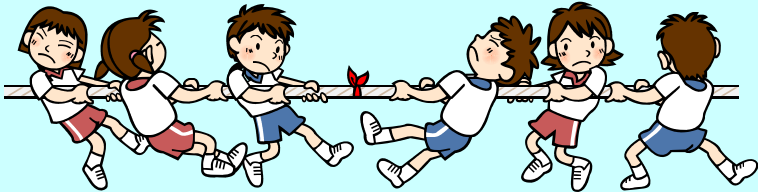
自主的・体験的な活動を重視した望ましい集団活動

活動のポイント

- ### 学級（ホームルーム）活動
- ・ 教師と児童生徒、児童生徒相互の受容的な人間関係をつくる
 - ・ 共同・協力のもとに、集団としての目的意識が高まるように工夫する

- ### 児童会・生徒会活動
- ・ 児童生徒の自発的、自治的な活動となるように工夫する
 - ・ 中心となる組織の構成や構成メンバーの人間関係づくりに配慮する
 - ・ 活動についての目標設定・振り返りを適切に行う

- ### 学校行事
- ・ 児童生徒が意欲的に取り組めるよう工夫する
 - ・ 他の教育活動と関連付けた活動となるよう配慮する
 - ・ 学校や地域の実態に即したものとなるようにする



よりよい食生活をめざした給食の時間（小学校・低学年）

場 面

小学校低学年の給食の時間ですが、偏食が多かったり、遊びやおしゃべりで食べようとしなかったり、箸の持ち方などの基本的な食事のマナーが身に付いていなかったりする児童が多く、食べる時間がかかる上、残食も多いのが現状です。注意しても、なかなか改善されません。

手だて

学級活動の「学校給食等」に係る内容について、年間指導計画に従い、着実に指導を続けることが大切です。

衛生的でかつ楽しく給食が実施できるように手洗いや身支度を正しくすることを習慣付かせたり、教室環境やグループ編成を工夫したりしましょう。

指導に当たっては、一口食べられるようになることを、偏食の指導の大きな一歩と考えましょう。児童の食への思いを大切に、無理強いをせず、苦手なものは、一口食べることから始めることが肝要です。少しずつ食べられるようになり、箸の持ち方など基本的な食事のマナーがよくなったりしたことを、しっかりとほめましょう。年間を通して少しずつでも成長していくことが大切ですから、長い目で指導していきましょう。

例えば 題材「健康によい食事の取り方」等を取り扱った学級活動の時間では、学校栄養職員の協力を得て、それぞれの食材のもつ栄養素と健康な体への必要性について、楽しく学習できるように工夫しましょう。

指導上の留意点

- 全教職員で、学校給食に係る指導体制や指導内容等について協議し、共通理解を図る。
- 全児童を対象に、アレルギーなどで食べることのできない食品がないかどうかの調査を実施する。
- 参観日や給食試食会などを通して、保護者に児童たちの給食の様子を見てもらったり、学年・学級通信等を通して知らせたりして、学校の取組への理解と協力を促す。
- 家庭での食習慣等について、保護者から直接話を聞くとともに、食べられるようになったことなどを保護者とともに喜ぶという心構えで、給食時間に見つけた小さな成長も保護者に適宜個別に伝えていく。

児童が主体的に取り組む清掃活動（小学校・中学年）

場 面

掃除の時間になってもなかなか取りかからず、話したり、遊んだりして、熱心に取り組まない児童がいます。他の児童もいっしょになってふざけていることもあり、指導に困っています。

手だて

何をどのようにやっていいのかわからず、ふざけている場合もあります。まず、一人ひとりが、いつ、どこをどのように清掃するのかといった役割分担を具体的に決めておくことが大切です。

家庭でほうきや雑巾を使う経験をしたことのない児童も少なくありません。「まじめにやりなさい。」と注意するだけでなく、雑巾の絞り方、ほうきの使い方、床を拭く手順など、具体的に一つずつやって見せながら丁寧に教える必要があります。きちんとできるようになるまで継続して支援することが大切です。

また、よりよい清掃に向けて、反省会をもつなど、めあての確認や相互に助言ができるような工夫をするとよいでしょう。形式的なものにならないように留意し、よい点を認め、しっかりほめることが大切です。児童たちに、清掃後の気持ちよさや人の役に立っているという気持ちをしっかりと味わせるとともに、工夫や努力をすればどんどん掃除が上手になっていくことを実感させることで、「掃除は面白い。」といった意欲をもたせましょう。

例えば それぞれの掃除場所に、使う道具と掃除場所と掃除の方法を分かりやすく絵にした役割分担表を掲示して、児童一人ひとりが役割を自覚できるように工夫しましょう。

指導上の留意点

- 全教職員で、清掃活動に係る指導体制や指導内容等を協議し、共通理解・共同実践を行う。清掃時間は、教職員自ら率先して清掃活動を行う。
- 清掃用具の状況をチェックし、必要な用具が必要な数だけきちんと準備されているよう配慮する。
- 子どもが目にする場所に、整とんのできていない箇所がないようにするとともに、学校の花壇、校舎や教室内の花等、美的環境を整備する。
- 家庭での手伝いなど、集団の一員として役割を果たすことの大切さを学校・家庭の双方で指導する。

児童が熱心に取り組む運動会の練習（小学校・高学年）

場 面

運動会に向けて練習に取り組んでいますが、ふざけてまじめに参加しない児童がいます。学年全体もなんとなく集中して熱心に取り組む雰囲気になく、計画どおりに練習がすすんでいない状況です。どうしたらよいのでしょうか。

手だて

体育や学級活動等で、運動会のねらいや意義、今年度に至るまでの学校としての取組などを一人ひとりが十分に理解できるようにすることが大切です。

地域や保護者、下級生からの期待をしっかりと感じとることで、高学年としての自覚を促し、意欲の向上を図る場を設定することが必要です。

係活動や応援など、運動会の運営に直接かかわる活動を仕組み、主体的な参加を促すことが大切です。そのために、スローガンやプログラムに児童たちのアイデアを取り入れると、一層意欲を高めることができます。

さらに、過密な練習計画などから不登校傾向に陥る児童もいる実態を考慮して、当日までの練習の見通し・計画、競技や演技の完成イメージなどを映像や文字などを使って視覚的にとらえることができるようにすることも必要でしょう。

長期的な指導計画を立て、体育の時間に少しずつ指導を積み重ねるなどして、運動会前になって過重な負担がかかることは避けたいものです。

例えば 昨年度の運動会における保護者や地域の方々の応援風景や上級生の自覚ある活動風景を撮ったビデオを観たり、低学年と同じ時間帯での練習時間を利用して、下級生にお手本を見せたりする活動を設定しましょう。

指導上の留意点

- 運動会のねらい・よりよい在り方について、毎年、全教職員で協議し、共通理解する。
- 過密な練習日程や天候等による子どもへの負担に配慮し、健康・安全面への対応を適切に行う。
- 参加する幼稚園、保護者、地域の方々との連絡・調整を適切に行い、小学校の子どもがかかわることができるような配慮をする。
- 地域や保護者などの感想から得た活動の素晴らしさを児童たちに伝え、次年度の運動会や日々の学習への意欲を高める。

生徒が主体的に参加する修学旅行（中学校）

場 面

修学旅行は、生徒にとって楽しみにしている行事の一つですが、友人と一緒に過ごせる喜びが先に立ち、「修学」という本来の意味を忘れがちになります。特に、班別自主研修での学習に生徒が主体的に、また意欲的に取り組むためにはどのようにすればよいのでしょうか。

手だて

事前学習では、まず旅行先の様々な情報を簡単にまとめ、その中から興味・関心のあるものを個人の学習テーマとする活動が大切です。

また、班別自主研修における班は、個人の学習テーマが似ている者や活動場所、活動時間が同じ者で構成されるよう工夫する必要があります。

個人の学習テーマに基づいた調査・研究の成果は、教科における学習内容を意識したまとめ方や発表の仕方を生徒自らが決定して実施する方法があります。例えば、現地で学んだことを俳句や絵で表現したり、現地の建造物の高さを測量したり、模型を作ったりすることなどが考えられます。

教科との関係性や発表形態別に事前事後の指導の担当教員を決定し、生徒各自の活動に対して適切なアドバイスを与えることも大切です。

例えば 全員が同じ「しおり」を持つのではなく、生徒各自が個人の学習テーマに応じたオリジナリティー溢れる「しおり」を持つという取組があります。生徒各自がノート1冊を用意し、事前学習における個人学習テーマの設定までの準備段階から利用します。インターネットや雑誌からの情報をスクラップしたり、旅先で購入した絵はがきや入場券、思い出の写真を貼るなどして、しおりを思い出のいっぱい詰まった自分だけのものにしていきます。もちろん、旅行日程や緊急連絡先など全員が共有する情報プリントも各自が貼っておきます。

指導上の留意点

- 各自で「しおり」を作る時間、旅行先を調べる時間を確保する。
- 「しおり」作りの中では、それぞれの生徒のまとめ方の工夫などを紹介しながら、お互いのよいところを認め合う姿勢を大切にする。
- 調べ学習一辺倒にならないように、教科の学習で今まで学んできたことを生かす考え方への転換を図る。
- 最後のまとめ方では、いろいろな見方・考え方を勉強するために、事前の発表会や事後の発表会を計画する。

全校集会での生徒指導的な話の進め方（中学校）

場 面

中学校での全校集会は、表彰や校長先生の話、生徒会活動の確認等が中心で、最後に生徒指導関係の話が入ることが多いようです。しかし、長時間にわたって話を聞くことは、生徒にとっても苦痛のようで、大切な話も上の空で聞きがちになります。

手だて

学校生活の問題点を指摘し、指導する内容だけに終始することなく、時期や行事等に関連して積極的な生徒指導につながるような内容を話すことが大切です。

例えば 「地元の人から『中学生がよくあいさつをする』と聞いて嬉しかった。」
「集会の前にトイレの前を通ったらスリッパが揃えてあって気持ちよかった。」
など、生徒のよい面（ほめる内容）を知らせることも取り入れたいものです。

また、毎回、同じ担当者が同じような内容の話をすることは極力避けた方がよいでしょう。やむなく同じ内容を話す場合は、話す人が変わると話の切り口も違って、その見方・考え方の違いから多くの生徒の心に届く効果を生むこともあるようです。話す内容には、説話や格言、歴史上の人物の言動など、生徒が興味や関心をもつような話を取り入れる工夫をしましょう。

また、耳で聞かせるばかりでなく、視覚的にとらえ、考える場面を設定することは有効です。

例えば 指導したい内容に近いテーマの絵本をプロジェクターを使って提示しながらの読み聞かせは、思春期にある生徒の心の中にも素直に入り込んでいきます。

指導上の留意点

- 消極的な指導内容を繰り返すのではなく、積極的な指導の場となるように心がける。
- 毎日の授業や学級活動などの中で、聞く態度については十分に指導する。ただ、しかることで聞かせるのではなく、その大切さを説く。
- 全教員で集会を支えるという意識をもち、それぞれの担当者が話す内容を事前に確認し合ったり、他の教員の立つ(座る)位置などを確認したりしておく。
- 全校集会での話を生徒の心に届けるためには、話す教師と聴く生徒との信頼関係が不可欠である。日頃の学校生活の中で、よりよい関係の構築に努める。
- 「生徒が話を聞かないのは、教師側にも責任の一端がある」という認識をもち、日頃から、生徒を退屈させないような話の内容や方法を工夫する。

生徒が家庭学習の習慣を身に付けるための工夫（中学校）

場 面

1年生の担任をしています。宿題が出ないと家庭で勉強しなくてもよいと思っている生徒が多く、毎日家庭学習をしている生徒は学級に数人です。一方、保護者は「どうしたら成績が上がるのか」「どうしたら家で勉強するようになるのか」などと、学習に対する関心は高いようです。生徒が家庭学習の習慣を身に付けるためには、どのようにすればよいでしょうか。

手だて

「自主学习ノート2ページ」などの課題を出し、毎日提出させるという方法が考えられます。またその際には、課題が見付けられない生徒に対しては学力等に応じて課題を与えるなど、個に応じた対応も必要です。

特に、毎日の規則的な生活リズムが、学習習慣を定着させます。まずは、1日の生活の中に学習時間をどう組み込むかを考える活動が大切です。

例えば まず、一定の期間、家庭での時間の使い方を記録して、自分自身の生活習慣の見直しと改善を行う活動を設定しましょう。その際、考えにくい生徒に対しては、参考になる例を提示したり、友達と家庭学習の時間確保の仕方について意見を交換する活動を設定したりしましょう。

家庭で学習したことが日々の授業に生かされるという実感が、学習の動機付けとなり、家庭学習の習慣化へとつながります。指導計画の中に、授業から家庭学習、家庭学習から授業という明確につながる構造を作る方法も考えられます。

例えば 家庭学習の成果を用いて授業を組み立てたり、授業の内容の復習を宿題にして、その取組状況を次の授業の最初に小テストで確認したりしましょう。

指導上の留意点

- キャリア教育において生徒自らの進路を考える活動の中で、日々継続できる努力として、目標を掲げながら一步一步着実に家庭学習をすることの必要性に気付くことができるようにする。
- 定期テストの前に、生徒が作成する家庭学習計画表の中に自己評価欄を設けるなどして、家庭での学習状況を把握する機会をつくり、生徒の学習への取組を家庭と協力して支援する。
- 教科担任と学級担任とが連携して、家庭学習の状況や日々の授業への取組状況を共有して、心配な生徒には個別に対応する。
- 課題の提出を求める際に、最も大切なことは、温かい評価を加えて速やかに生徒に返却することであり、課題の取組状況を把握した上で、個に応じた細やかな指導に生かすなどして、生徒との信頼関係をつくることが大切である。

一人ひとりが積極的に参加する合唱コンクール（高等学校）

場 面

クラスの結束を強め、学校の活性化を図る「校内合唱コンクール」において、クラスで歌う曲目の選定や自主練習を実施する際に、雰囲気盛り上がり、一人ひとりが積極的に参加するように工夫して、クラスの生徒全員の力を結集したいと思います。どのようにすればよいでしょうか。

手だて

校内合唱コンクールに向けたクラス練習を行っているとき、様々な問題が生じることがあります。その一つは、全員が積極的に参加して歌っているわけではないことです。一生懸命歌う生徒もいますが、多くの生徒が下を向いて歌っており、「歌っている」というより「歌わされている」という感じがあります。そこで、合唱コンクールで全員の力が一つにまとまることをめざして、次のような工夫が欠かせません。

- ① 合唱コンクールに向け、「歌声でクラスの心をつなごう」など、クラスの目標を立てる。
- ② 曲は、話し合いによって、ある程度歌いやすい曲を選ぶように努める。
- ③ 自主練習において歌詞を書いた大きな紙をはるなど、雰囲気が盛り上がるようにする。また、歌唱が苦手な生徒が自宅でも練習できるようにCDを準備する。
- ④ 練習用に全員同じ楽譜をそろえ、一体感を高める。

指導上の留意点

- 前年度の自分たちの合唱や高いレベルの合唱をビデオやDVDで見せ、目標や目標達成のための具体的な方法を決める。
- 曲目をクラスで試聴して決める。2～3曲を決めておくと、他のクラスとのバッティング等による曲目の変更もできる。
- 自主練習の雰囲気を盛り上げるため、練習開始前に歌う曲のビデオやCDを聴いたり、歌詞を書いた大きな紙をクラス（練習会場）に貼ったりするなど、工夫する。できれば、パート練習用の音源も用意する。
- 指揮者、伴奏者、パートリーダーなど、生徒の中のリーダーを育てる。
- 練習開始までに、クラス全員分の楽譜を購入する。
- コンクール会場は、音響効果のよいホール等を利用するとよい。

文化祭における積極的活動で生徒を生かす（高等学校）

場 面

高等学校の文化祭で、クラスの出し物が焼きそばの模擬店に決まりました。日ごろから掃除など、決められたことはきちんとやるが、なかなか進んで学校行事に参加しようとなし、孤立しがちな第2学年の生徒が、これを機に積極的に参加するようになればと思います。「一人一役・連係プレー」をスローガンに、各自が責任をもち、意欲的に取り組むようにしたいのですが、どのような工夫をすればよいでしょうか。

手だて

学校行事は、普段の学習活動とは雰囲気が変わり、生徒の個性や力を発揮する好機です。この機会を利用して、生徒の更なる自発的、意欲的な活動を支援することは、人間性を伸長させる上で大切なことです。しかし、積極的に取り組もうとする生徒がいる半面、傍観的姿勢の生徒も見受けられます。

そこで、楽しく準備し、やりがいのあるイベントにするため、生徒同士の話し合いで一人一役を決めた上で、各自の役割に責任をもって、自主的に取り組むことが重要です。企画、用具の準備、買い出し、会場設営、食券作成・販売、会計、ポスター制作等々、前日までに準備することは山ほどあります。そして当日、全員の活気あふれるパワーで盛り上げて成功に導きたいものです。そのためには、生徒全員の協力体制づくりに向けた配慮が欠かせません。クラスの盛り上がりがあれば、初めは消極的だった生徒も張り切って任にあたるはずで

指導上の留意点

- 文化祭での目標をクラスで話し合い、決まったスローガンを掲示して、意気込みを共有する。（「全員協力のもと、一人一役で成功させよう」など）
- まとめ役の生徒が大判用紙に一連の計画の全体を提示し、共通理解を図る。
- 係ごとの仕事を一覧表にして教室内に掲示し、他の人の仕事についても相互に認識する。
- 昼休みを利用して、進捗状況を報告し合い、遅れているところはみんなで話し合い、協力するようにする。
- 一部の生徒に過重な負担がかからないよう、担任が全体を把握しておく。
- 安全及び衛生面の指導を徹底するとともに、保護者に企画を周知し、場合によっては送迎などの協力を仰ぐ。
- 終了後に振り返りの場を設定するなど、達成感を共有できるよう工夫する。

生徒会リーダー研修で生徒の主体性を育てる（高等学校）

場 面

生徒会活動が生徒主体の自治的・自発的な活動となるよう、生徒会役員になって間もない生徒会執行部の生徒（クラスや部活動のリーダー等で希望する者を含む。）を対象に、リーダー研修会を実施し、リーダーとしての自覚や意識を高めたいと思います。リーダーに必要な資質を高めるためには、どのような研修をすればよいでしょうか。

手だて

まず最初に、信頼関係を築く一助とするため、グループ単位で課題解決的なゲームを行います。ゲームは、一人では解決できない課題に対して、互いに協力し合い、知恵と勇気を出し合って解決できる内容のものにすることが大切です。

次に、生徒集団をまとめるために必要なリーダーとしての心構えや、スピーチの仕方、会議や式典の進め方等について、実際の場面を想定して学ぶとよいでしょう。

その後、客観的分析力、論理的思考力、発表能力等を身に付けるために、ディベートを実施します。ディベートの構成やディベートにおける「話の聞き方」「立論の仕方」「ジャッジの方法」等について学習した後、主題を選び、5人のメンバーからなるグループ内で、肯定側・否定側に分かれて、ディベートを行います。

続いて、企画・運営力を身に付けるために、具体的な学校行事を想定し、計画を立案する練習をします。最終的には、実施要項（計画書）を作成し、その実施要項をみんなの前で発表すると効果的です。その際、計画の妥当性について、予算、時期やニーズに合っているかなど様々な観点から、お互いに質問や意見を出し合うことが重要です。

指導上の留意点

- 各ゲームにおいては、与えられた課題とルールを十分理解させるとともに、課題解決に当たっては、全員で協力して取り組ませる。
- リーダーには、「責任感」「判断力」「計画性」「思いやり」などが必要であることを理解させる。
- スピーチをする際には、話す内容に加え、声の大きさ、話すスピード、アイコンタクトや間の取り方などについても留意させる。
- ディベートにおいては、あくまでも「正しいことは正しい」「間違いは間違い」という姿勢で取り組ませるとともに、対立・衝突を恐れさせない。
- 行事を企画・運営する際には、PDCAサイクルに従って常に振り返りと改善が必要であることを理解させた上で、研修会が生徒による自主運営となるように仕組む。
- 実施要項(計画書)が分かりやすいものとなるよう工夫させるとともに、発表や意見・質問の際には、スピーチやディベートで身に付けた手法を活用させる。

自覚を高めて生活のリズムをつくる（高等学校）

場 面

生徒会役員が、あいさつ運動と遅刻を減らす一環として、交代で毎朝、校門の立番を行っています。秋になり、朝晩めっきり冷え込むようになったこともあるのか、1年生のある生徒が、毎日のように遅刻して登校するようになりました。理由は、「寝坊」や「体調不良」が原因とのこと。このような遅刻を減らし、自覚を高めるためには、どのような方策が有効でしょうか。

手だて

生徒が遅刻する理由は、本人の問題であると同時に家庭の問題を含んでいる場合があります。そこで、その生徒から遅刻したことに対しての事情をすべて聞き、生徒理解に努める必要があります。しかし、結果的に医学的な原因が見つからず、遅刻の理由は本人の自覚の問題であることが多いのも事実です。

そこで、遅刻に対する生徒の自覚を高めるために、時間を守ることの大切さや、遅刻は良くない理由、やむを得ない遅刻とそうでない遅刻について理解を促すことが効果的です。そうでない遅刻の場合、怠けてしまいたい気持ちが優先することによるものなので、それを克服することの大切さについて話し合うなど、意思疎通を図ることが重要です。

また、遅刻に対する本人の自覚を確認する手段として、その生徒と面談し努力目標を決めるよう支援することも有効です。この努力目標に対する評価を、毎週、その生徒とともにいき、次週へと引き継いでいくことにより、徐々に遅刻は減るものです。

指導上の留意点

- 遅刻するにはそれなりの理由があるので、まず生徒の話をじっくりと聞くようにする。
- 指導の際は「遅刻報告カード」等を利用して生徒との対話の機会を有効に活用し、生徒との人間関係を築きながら、生徒の特徴や小さな変化をとらえるようにする。
- 遅刻の原因が分かれば、その原因を解決するための支援を行うと同時に、時間を守ることの重要性を理解させる。
- 話し合いにより努力目標を決めさせ、その状況を毎週評価し、次週につながるように継続して指導する。
- 始業と同時に家庭に電話連絡し、担任として心配している旨を伝えるなど、保護者等と極力連携して指導を進める。

キャリア教育を通して進路を明確にし、自己実現をめざす(高等学校)

場 面

高等学校1年生を対象とした進路指導において、まだ将来の進路の方向性が定まっていない生徒が、現代社会に対する関心や意識をもつとともに、自分の特性を考えるような工夫をしたいと思います。学習やその他の活動に対し、目的意識をもち、意欲的に取り組む姿勢を育むためには、どのようにすればよいでしょうか。

手だて

まず、担任が個人面談で、将来の職業選択に向け興味・関心があること、家族が働いていることへの思い等について生徒から聞き取り、記録カードに記録していきます。

また、科目「国語総合」の「体験を聞く」などの単元において、生徒が仕事やそれに伴う体験を聞き、インタビュー記事にまとめる活動を、グループ単位で行うとよいでしょう。科目「現代社会」において、「豊かな生活と福祉社会」などのテーマで、調べ学習に取り組むことも有効です。

こうして各教科等において適切な職業選択に向けた基礎を培う一方、総合的な学習の時間において、進学したい学部・学科や就職したい業種・職種について、複数を選んで資料を収集し、特色等をまとめて発表します。

さらに、各界で活躍中の卒業生を招いての進路講演会を聞き、小論文の練習も兼ね「10年後の私に」などの文章を書くなどすると、自ずと目的意識が高まるでしょう。

指導上の留意点

- 中学校までのキャリア教育の積み上げに基づいた内容となるよう配慮する。
- 個人面談の記録は、各教科担当が目を通し、諸活動を行う際に、生徒への指導助言に活用する。また、各活動における状況も記録しておく。
- 「国語総合」「現代社会」「総合的な学習の時間」の活動については、順序は問わないが、極力連続して実施するように各教科担当が事前に協議を行う。その際、進路に悩んでいる生徒等、留意すべきことについて情報交換を行う。
- 1年次であるので、文章を書かせる際には、できるだけ自由に考えられるように、大きいテーマを設定する。
- グループ活動を多く取り入れ、他の生徒からも情報が得られるようにする。
- 学校で実施するインターンシップ、職場見学やオープンキャンパスなどと、関連付け、1年次から2、3年次への取組の継続性に留意する。

係活動等における配慮

【事例1】当番・係活動への参加が難しい児童への配慮

「やることが分からない」ことが原因になっていることが多い。学年が上がるにつれ、失敗経験からやる気をなくしたり、「すぐさぼる・じゃまをする」などの悪い評価が固定化していたりして、ますます参加を難しくしている場合もある。

対応としては、本人の得手不得手を考慮し、手順や結果が分かりやすく、すぐに評価できる仕事を担当させる。手順を表などにして示しておくことでスムーズに活動できる。

また、当番・係活動は教員の目が届かないことが多く、周囲からいろいろ言われて混乱する場合もあるので、はじめは一人で活動させたり、上手にかかわることのできる友達と一緒にさせたりすることも有効である。この他にも、終わりの会で当番・係活動を振り返る際、友達のいいところを互いに報告させるようにする。「できた」という達成感が、仕事への取組や参加の姿勢の改善につながる。

【事例2】ほうきでゴミを集めることが難しい児童への配慮

視知覚認知や空間認知に弱さがある児童にとって、小さなゴミをほうきで掃きながら一か所に集めることは難しい。作業内容としても、興味をもちやすいものとは言えず、習得させるのはなおさら難しい。

そこで、2 cm程度の四角に切った広告や使用済みの紙を床にまき、床にはったビニールテープの目印の中に、ほうきで掃き入れる練習をする。掃いた紙が移動する様子がよく見えることに加えて、ゲーム感覚も手伝って、意欲的に取り組むことができる。

紙は、指導の初期では多めにまき、徐々に減らす。場所は廊下のような幅の狭いところから始める。目印まで一直線に進むことがあるので、掃いた後には紙が一枚も残らないように廊下の幅を往復しながら、徐々に目印の方に進むようにさせる。

【事例3】ランドセルが片付けられない児童への配慮

朝、登校してランドセルを机の上に置いたままにしている児童がいる。片付けをしないままぼんやりしていたり、片付けをそっちのけで遊びに行ってしまうりする児童は、片付けを苦手と感じている場合が多い。

まず、机の中や収納場所が使いやすいかどうかをチェックし、可能なものは改善する。机の中に入れるものを精選したり、個人用の整理箱を用意したりするのもよい。

次に、一緒に片付けを手伝いながら「何が原因でできないのか」を探り、それに対する手だてを考える。手順が分からない場合は、手順をかいたカードを見ながら片付けるように指導する。カードを腕時計のようにすると、両手が使えて片付けやすい。児童によっては、一手順ずつ自分でチェックするようにしたり、シールなどを用いて継続を図ったりするのも有効である。

全体集合等の場面における配慮

【事例1】ラジオ体操などの動作模倣が苦手な児童への配慮

見本となる動きを正確にとらえることができなかつたり、自分の身体の動きをつかむことが難しかったりする場合は、指導者と子どもとが向かい合った状態で、動きや姿勢を模倣させるのは難しい。より分かりやすい方法で指導する必要がある。

① 手を合わせて行う動作模倣

指導者と児童とが手足を軽く触れ合わせた状態で、バンザイや手を広げる、足を上げる等の大きな動きの模倣を促す。できるようになれば距離を離していく。

② 鏡の前に横に並んで行う動作模倣

大きな鏡の前に、指導者と児童が横に並んで立ち、指導者がゆっくりと動作の手本を見せる。児童は手本と自分の動作が同じことを鏡で確認しながら模倣する。いずれの方法でも、「バンザイ」、「右手を上げて」、「足を上げて」など動作を表す適切な言葉かけをして、子どもの注意を引きながら行うことが大切である。

【事例2】場に応じた声の調節ができない生徒への配慮

場に応じた声の調節ができない生徒は、自分がどの位の声を出しているのかが理解できていないことが多い。そこで、まず教員の声で生徒の声の大きさを示し、自分の声の大きさを自覚させる。

次に、声の大きさを図や表で示した「声の物差し」を作成し、どういう場面でどのくらいの大きさを出せばよいのかを指導する。それでも声の大きさがコントロールできていない場合、その場で支援できるときには、そばで声をかけるようにする。それが難しいときは、後で「声の物差し」を見ながら、どのくらいの大きさを話せばよかったのかを確認する。

前もって不適切な場面が予想できる場合は、どの大きさを声を出せばよいのかを確認してからその場に臨ませるとよい。うまくできた場合はしっかりと称賛し、場に応じた声の大きさを自覚させるようにする。

【事例3】相手の表情や気持ちを気遣うことの難しい生徒への配慮

相手の表情や気持ちを気遣うことが難しい生徒は、表情の意味や言葉のニュアンス、暗黙のルールを知らないことが多い。例えば、相手が急いでいるのに気付かず長話を続けたり、大柄な人に向かって「君、太っているね。」、背の低い上級生に「背が低いですね。」などと言ったりする。

そこで、表情の意味を言葉で表したり、絵を使って嫌なことを言われた相手の気持ちを考えさせたり、ロールプレイをしたりして対応の仕方を学ばせる。

こういう力は一度に身に付くものではないので、学活等の時間を利用して、体験を通して人間関係がうまく築けるように指導していくことが望ましい。

学校行事等の場面における配慮

【事例1】 クラスマッチで勝ち負けにこだわる児童への配慮

勝敗へのこだわりが強く、最初から取り組もうとしなかったり、負けそうになると途中で投げ出したり、終わってから相手や仲間を責めたりする児童がいる。物事の結果しか見えない、勝つか負けるか(1位か最下位か)の両極端にとらわれるなどの、認識の偏りに原因があると考えられる。

まず、教員は常に、結果だけでなく途中経過や取組の様子も評価する姿勢で臨む。また、事前に個別あるいは全体で、「負けたら(勝ったら)どうするか」を話し合い、約束を決めておく。何らかの形でそれを表示しておく、約束を思い出させることができる。終わった後も、約束が守れたことを忘れずに評価する。学校だけでなく、家庭内での評価の影響も大きいので、家庭へも協力を呼びかける必要がある。

【事例2】 集会などで自分の場所にいることが難しい児童への配慮

全校集会や行事などで、体育館の外で過ごしたり、列の後ろを歩き回ったりする児童は目立つので、教員はすぐに改善させたいと思いがちである。しかし、列を離れたことを叱るより、離れるまでの時間を延ばす方法を考えることが大切である。

- ① 集団の中で、みんなと同じように過ごすことが意識できていない場合は、補助をする者がそばで見守ったり、声をかけたりする。
- ② フープ等で自分の場所を意識させる。著しく困難な場合は、大きめの円を描き、そこから出ないようにさせ、一定時間その中で過ごせたら円を小さくしていく。
- ③ 事前に児童と話し合い、その場にいる目標タイムを決める。時計やストップウォッチを利用し、時間の経過を意識させ、約束の時間をクリアしたら、上積みせず、できたことを称賛する。クリアできなかった場合も、がんばりを認める。

このような事例は短期間での改善が困難な場合も多い。多動は年齢を重ねると減少することもあるので、活動ごとに以前と比較し、児童の成長や変容を認めるようにする。

【事例3】 修学旅行等の参加に不安をもつ生徒への配慮

行事への参加に不安をもつのは先の見通しがもてないからである。事前に活動の内容を具体的に説明したり、困難が予想される場面についてロールプレイを行ったりして、不安を取り除くようにする。内容を説明する場合、口頭だけでなく写真やビデオ等を見せながら行くと、生徒も場面をイメージしやすくなる。

困難が予想される場面は個々の生徒によって異なるが、自主研修や班活動での友達とのトラブル、乗り物の切符等の買い方が分からずパニックを起こしてしまう、興味のあることに夢中になり、グループから離れてしまう等が考えられる。信頼関係のある友達や言って聞かせることのできる友達と一緒にすることも大切な配慮である。